

瓦

礫

瀧

春

一

暖流叢書 第二編

瓦
礫

瀧
春
一

俳句図書刊行会版



目次

近隣	(昭和二〇年)	一
東京の麥畑	(昭和二一年)	三
若き家族	(昭和二二年)	一七
瓦礫	(昭和二三年)	三九
仮装人生	(昭和二四年)	五五
五十の手	(昭和二五年)	七五
太陽の落し子	(昭和二六年)	九三
後記		一一二

近

隣

昭和二〇年十月以降

鴟の秋隣近所の顔そろふ

水澄むや田畑も土に先づ還る

田に畑に若き人影小六月

東京の
麥畑

昭和
二年

落葉踏む音の櫟は鋭かり

茶の花や購ひ得たる今日の糧

清らなる波もわびしや都鳥

元旦や吾に人麿芭蕉あり

冬の蝶青き籬を慕ひくる

ひるすぎで藍ひといろや春の富士

吾のみに火桶たまはる初句会

種蒔や世に悪農のありといへど

風塵やメーデーの季語よみがへる

緑蔭のわかうど弊衣恥づるなし

東京に麥熟るる香の暗さかな

縷々として野茨の径の薄暑かな

十葉や今年の更に野づらめき

麦焼のばりばりところはずみをり

玉葱は野荒しの手にあへなかり

飢え泣くは萬葉よりぞ梅雨の月

白き米もらうて夏曉汽車を待つ

門の田に四方に遙かに田草取

霊棚やほほづきは子が培ひし

野川満ち満ちてしづかや雲の峯

鶺鴒の来てゐる雨のお茶の水

わかもの
の無為
と思は
じ盆踊

蘆刈の
たつき
此の世
にあり
しかな

吾が家
の母と
なり烏
瓜簷に
吊る

初火鉢事に堪へむと想たのし

干糲を手に均らす音寂かなり

雪の不二銭湯に朝湯はじまりぬ

唯一つの神再た説かれクリスマス

吾が子らの知らぬ日なりきクリスマス

火の山や赫^かつと飛びくる冬日の箭

火の山の面て隠さず雪ふれり

軍衣袴のわびしき一人かるた会

東京に陋巷のなし春の雪

雪空に枯木は色を発しけり

雪の淵雲の破やれにも淵の碧さ

雪解風日は雪空にただよへる

若き家族

昭和三年

冬日消え現れすこしづつ去りぬ

花のひらくごとく冬日の射しにけり

人の意志馬を離れず耕せり

枯れ枯れし極み辛夷の咲きにけり

春雪の螺旋しづかに立ちめぐる

軽井沢一句

高原の春風梅も椿もなし

白木蓮ひらりと月の瞬ける

歩むときの田螺悉く歩みをり

田螺移るしんしんとしんしんと淋し

青葉木菟女も夜々の棲り木に

十字路の真ん中に蝶の相逢へる

群を追ふ蝌蚪の叫びの尾を振れり

執
拗
に
黒
き
雨
風
白
牡
丹

青
嵐
沖
の
一
線
撓
む
な
し

青
嵐
海
の
一
滴
芝
に
ふ
る

藤浪に縋らんと虻宙に待つ

落葉松や虹のかけらの白く褪せ

高原の秋の薊は眉の辺に

恋は紅く川瀬の魚を彩りぬ

短夜の白き高原に汽車渴す

虹架けし草木の歓呼音もなし

虹の空離りつつ
つ鞆米を秘む

蟬の聲は絶えず
梶くち子のなし香に間あり

噴水に真晝の地つち
の息づかひ

わけもなき殺意の靴が毛蟲逐ふ

断末魔毛蟲の貌の口ばかり

牙鳴らす毛蟲たちまち抹殺す

晝
顔
は
み
な
な
肌
色
の
熱
き
色

と
う
も
ろ
こ
し
釜
茹
で
に
し
て
米
を
見
ず

洗
礼
は
真
晝
の
海
に
没
り
し
記
憶

焼酎やその昔かみ神の御子なりしが

青田風人ら負荷にひしがれて

瓦斯の火のいのち終るや蟬鳴き出づ

海岸日傘若き家族の世に代り

青海に額ぶつけて泳ぎ出づ

泳ぐ女の片眼と見合ふ静かさよ

泳ぎつく女のもろ手岩に垂り

片頬をいつも撲たるる稲光

白服の友の名刺の嘘を知る

澄
み
と
ほ
る
風
と
光
に
虫
溢
る

弱
し
甘
し
と
朝
顔
の
辺
に
詰
ら
る
る

女
ひ
と
り
の
一
坪
の
日
ざ
し
貝
割
菜

怖ろしと女の云ひし露の径

三日月を愛す女の性さが変らじ

秋の土に播くや春よりも意の深く

か
た
ま
り
て
男
ゆ
ま
る
や
酉
の
市

朴
一
葉
て
の
ひ
ら
は
尚
艶
め
き
ぬ

諸
蒸
け
た
り
雨
の
落
葉
の
香
と
お
も
ふ

樹の林檎憎しみの眼を知らざらむ

天窓のミニチュア枯木其の青空

車中

桔野薔薇色旅人暗く犇めける

諸負うて虎口のがれし如く云ふ

聖誕祭カストリ吾らが酒にして

恋つなぐ嘘を云ひ得ず枯野星

シヤボン塗るさむき自画像何をか恋ふ

ポスター日々はびこる街に雲凍る

日本髪凍れる雲の下をゆく

遠き日の冬帽一つ知性とても

愛情は何かこまごまものをくれる

瓦

礫

昭和三年

サナトリウム落葉にジヤズをふりまける

サナトリウム春晝カレーを匂はする

サナトリウム枯木に白き煙草くはへ

土のユーモア
麥踏む足どり
手を腰に

火口湖の壁は
微塵もゆるぐ
なし

雪嶺よ
男の愛の
やすらかさ

電柱芽を吹き「よこせ、よこせ」と書いてある

初蝶やいのち溢れて落ちつかず

花蔭に逢ふや邪恋といふは無し

或る塑像骨の髄まで見えてくる

学生の物売る媚に白き疾はや風て

夏時間に入るやえにしだ黄にかたま困る

桐咲くや日がな器械に素朴な眼

ストの歌穂麥が塀を洗つてる

南風の路面のひろさ日曜日

薔薇はなほ花びらたたむ思慮の深さ

誰か吾をボヘミヤンと云ふ雲の峰

緑蔭のしぐさいづれも無言劇

水原秋櫻子先生を訪問現在の俳句観を述べて諒解を求む

かなかなや 師弟の道も恋に似る

馬酔木に復帰せる石田渡郷氏よりの来信に応へて

「去来同心」 ぼくは瓦礫を踏むたのしさ

田の龜裂喪章のやうな蜻蛉ばかり

炎ゆる畦乙女の跣足滴りゆく

かぼちや花ざかり一家の誰も不具

木々の雨密語をつつむまで暗む

愛
す
れ
ば
臆
す
る
女
月
に
媚
び

純
情
さ
女
の
服
の
洗
ひ
ざ
ら
し

赤
い
ブ
ラ
ウ
ス
人
間
臭
い
落
花
生

筋肉質の女のもてる白団扇

女の捨てたタバコ女の血にまみれ

ひとすぢの光つめたき白髪抜く

初秋の靴下逢ふ日のみに穿く

青空や欠申を詫びる目の微笑

カストリ屋台裏の芒を壇に挿す

銀座八丁虫のこゑ踏む土なくて

木つ葉の家粟の一と穂を窓に置く

粟の穂の重み言葉を敦うする

赤い飛沫秋日に頭突つ込めば

晝の庭落魄めきて残る虫

木の囁きは囁きとして晝の虫

カーネーションかたちなき色をまざと見き

白菊は常に黄昏の翳を含む

何も落さぬ空の白眼に堪へきれず

假装人生

昭和二十四年

蓼科高原 一句

めぐり立つ雪山胸がどきどきする

安息日四角い建物が竝ぶだけ

黒い外套紅いボタンに変へた幸

河が埋められてゆく明日への約束

破産の店舗枯れた柳に星搦む

泥酔の意識立春の風びようびよう

春風ばかり物音のない不安

春風にひたひたと四肢を沈ませる

春風に童女のこゑのなまめかし

寒
雷
や
石
よ
り
も
乾
く
馬
の
膚

朝
だ
け
は
辛
夷
の
花
に
話
し
か
け
る

一
と
花
の
白
き
平
安
に
す
が
り
つ
く

春の暮生きる筋書をたのしみに

與へられしと緑の蔭を信ずる日

ドレスの原色そんな女に見えてくる

没落の庭園波の愛撫にいきつづけ

髪結ふ老女遺愛の花弁は放埒に

くつがへる富よ鼻をわたれる蟻一つ

なめくぢり杜翁も家を脱がれ死にき

薔薇溢る薔薇の主体の淡々しさ

ちろちろ鳴る鈴蘭に霧が熱つぽい

雑草曇れば瓦斯タンクへぶつかつてゆく

プールに溜つた空のかけらと雑草

郷愁のやうに少し染まつた湯の手拭

湯の町は雨音にかはる歌謡曲

祭囃子無心の歓喜匆ね返り

白い汗にオツチヨコチヨイの過去の入墨

夏
シ
ヤ
ツ
に
し
つ
と
り
夜
の
海
の
媚

素
朴
な
男
の
腋
毛
が
そ
よ
ぐ
海
の
風

帰
り
は
一
人
初
蠅
は
短
く
了
る

それでも青柿家の歴史は私から

風鈴鳴らして協約も何もない会社

上高地にて 三句

白樺に銀座人種の哀しい調和

白樺に小^オ麥^ク色^ルの顔匂はせる

みんなが飲む水穂高を捲いてくる水

初蠶よ朝めしの熱いじやがいも

吾をもてなす焼酎しんと澄み堪ふ

真夏の卵を焼いてくれた少女も患者さん

灯影のやうな西日古典のうす暗さ

秋風が扉を開けたままの晝寝夫婦

夏川の底を踏まへた童女の足

虫の怒青白き翅をふるはせる

秋晝の耳朶にひびきてマツチ点し

虫のもろごゑ月光の山へ挑む

赤とんぼが擱む背広の毛の匂ひ

芥^{ごみ}
溜^{ため}
の
甘
き
腐
臭
が
彼
女
の
巢

年
の
暮
の
心
最
后
に
つ
ん
の
め
る

つ
め
た
い
焼
酎
燃
え
て
く
る
ま
で
心
の
綾

夫婦別居の夜々毛のシャツのまま寝る

盲めしひの魚族冬の海から捕はれる

青春の假装枯葉を蹴る足どり

寒いエロシヨウ子供と老婆のみ笑ふ

落葉松の無数の幹が雪を刺す

五十の手

昭和二五年

ストーブに薔薇を投げ込む五十の手

沈丁匂へば蔭の女で生きる幸

病むひとにみとりのひとに姫鏡台

月 給 の 小 刻 み 春 も 少 し づ つ

あ ひ び き の 哀 愁 崖 に の こ る 雪

女 の 生 き 方 そ れ ぞ れ 雛 の 日 の つ ど ひ

夕空碧く切なし雛をまつる日も

風音ばかり春の怒濤は徐しづかにけぶる

日の姿なく春の潮きらきら燃え

日鉦木戸ヶ沢鉦山 五句

顔打つ滴り鑿岩の響いんいんと

探鉦の意志見る見る岩に食ひ込んでゆく

新樹のそよぎベルトの鉦い石しの照り曇り

青嵐あかがねは金色に沸き立つ泡

研^{ずり}の堆積に馬と人間と五月の風

明易き逃避の恋の田舎町

胸重し愚かに石の群立つ墓

墓の跳ぶ速さ何物かを逐へる

人待つ思慕ででむしは幹をひたのぼる

樹を打つ雨の暗きに覺むるかたつむり

熱帯魚この寶石は生きてゐる

山中湖 五句

富士山麓日盛りの富士変哲なし

火山帯峽は清しや青田満つ

オール握ればひたと真向きに女の顔

声々に夜色を怖る法師蟬

湖の花火か黒き富士を背^{バック}景^クにして

青毬栗シートに女横たはる

西日の中ギブスの足をころがせる

人
溢
れ
新
涼
の
街
灰
色
に

崖
迫
り
わ
ん
わ
ん
わ
め
く
秋
の
蟬

夜^ナ
間^イ
野^タ
球^リ
煌
々
こ
の
く
に
た
み
の
か
な
し
き
闘
志

秘
む
る
恋
落
葉
べ
つ
と
り
濡
れ
て
く
る

ち
ち
ろ
虫
ふ
さ
ぎ
の
虫
に
浮
気
の
虫

日
曜
無
休
け
さ
は
ひ
と
り
の
露
の
道

月のぼる
洪水^{みづ}跡^{あと}の腐臭野に満ちて

棚の葡萄る
いるい垂れて滴る空

朝の葡萄氷の如し
空より享く

空 焼 け て ま く な ぎ の 如 し 秋 燕

去 ぬ 日 近 き つ ば め の 乱 舞 い つ ま で も

労 組 本 部 秋 夜 の 茶 筥 さ ら さ ら 鳴 る

燈下親し三つの椅子に女四人

別れ来てしばらくありて夜を寒み

リング剥く情婦のもはや男声

セーターの乳房元より拵へ物

秋の蝶いでゆに墜ちて死なず浮く

柚味噌嘗めく不貞の女可愛くて

水は息つめて水鳥をねむらす

雪嶺やシーツ干されて暗む机

歳晩の町へしづかな墓地を抜ける

太陽の落し子 昭和二六年

蜜柑分けあふ女ら一人の罪を知る

憎みあふ笑顔正月の晴着著て

風雪に身を屈するは快し

風雪の中にしておもひきはめむこと

風雪の底に親しき言交はし

風雪の地を見てネオンの彩を見ず

雪まみれの人ら
昂り電車に満つ

吹雪の底の酒は
胃の腑へ下りゆく

来り去るひびき
春夜の高層に

都心の高層春月更に離れ浮く

職場の誰彼眸をかがやかす海辺にて

種唐黍かんかん硬し寒を経て

唐黍の琥珀の玉に土を被せる

太陽の落し子田螺這ひ動く

苺喰ぶる眼まなざ差し濡れてわれに向く

金蓄むる百姓に無く晝蛙

蠅生る厨に独活のかをるとき

独り身の女の調度蠅生る

何もなき路初蝶の翔けり過ぐ

もつれ蝶発止と打たる人の墓に

谷中にて 二句

櫻満開尿臭の中におでんの墓

落花の中漾ふと見しは貧しき墓

人を創る春夜つめたき泥を以^もて

幸福に放心の蝌蚪流さるる

歩を合はす子の体臭に五月の路

清瀬にて 一句

雀巢立ちぬ病む人ら疑ひ多し

わが口笛鳴らず開襟シャツの朝

箱根にて 三句

うぐひすや梅雨の曇りはぎんいろに

ハイカーの無頼真晝のほととぎす

玻璃戸に咲く蛾族よすでに愛に飽く

心に觸るるごとしクローバに手を置きて

手賀沼にて 八句

涸んだ乳房へ跣足の子もう大き過ぎる

せつかちなよしきり牛をよび起す

曾遊の沼べり青蘆胸に寄せてくる

麦飯ふく甘い匂ひへかしぐダリヤ

貧しとも見えず金魚玉に鮎ばかり

ゴルフ場の青い波間の草取親子

梅雨の沼小舟いきいきよぎりゆく

青田に蝶群れ沼はとろりと銀鼠

遠き日の映画のピラとラムネ飲む

夏瘦知らぬ腕の時計を解き放つ

一茶の墓 一句

人目に曝す一基夏草の蔭だに欲し

赤倉 二句

高原 八月 花圃は 歡喜の 朱と 金と

高原の花圃 いつ見ても 衰色なし

いづこの木犀 朝の鞆は 飯の重さ

皆 白 き 職 場 の 茶 碗 雨 月 夜

ネ オ ン 咲 き 咲 け ど 三 日 月 更 に 澄 む

電 力 危 機 の 巷 冷 雨 に づ ぶ 濡 れ て

コスモスや夢二の絵など子は知らず

稲穂にざらざら触れて夜勤の道急ぐ

墓場より寄する秋の蚊凄じき

友の結婚を祝いて

菊
月
夜
く
ら
き
木
蔭
も
香
に
満
ち
て

後記

私の第一句集は、馬酔木発行所から石田波郷氏の尽力で出してもらった『萱』である。これには大正十五年一月水原秋櫻子先生の門に入ってから昭和九年頃までの作品を収めた。

第二句集の『菜園』は、『萱』以後昭和十五年までの作品を、第三句集は主として戦争中の作品で、幼ない子供や妹達を疎開せしめた信州の山の名其儘に『常念』と名づけた。『常念』は昭和二十年八月

十五日までの作品で了つてゐるのだが、その後昭和二十六年までの七年間の作品約二千句中から二九一句を収めたのが本句集『瓦礫』である。

考へてみれば、大正十四年一月から昭和二十六年十二月までの二十七年間休むことなく俳句を作つて来たが、其の対象とする所は、美しいと思ふ自然か、日常茶飯の自己の生活を中心とするものであつた。これは俳句の性格として当然のことであると思つてゐたが、敗戦後、自己の心的革命と日本伝統の短詩型文学である俳句が、果してこれからの文学として生き得られるか否か疑問を抱くやうになつた。したがつて従来の俳句の約束に疑問を持ち、先づ表現上の枠を外づした。「無季容認」と「十七音基準律」を主張したのがそれである。俳句表現の枠を外づすと云つても、この主張は極めて消極的であり最小限の

ものであると私は考へてゐる。

更に内容に於ては、焦土の瓦礫の上に喘ぐ人間の痛ましき姿を、そして其の人々の心の底にある美しき魂を把握せんと努力した。そのために伝統の最短詩型は如何に酷使されたであらうか。

俳壇の或る人々から私の姿は徒らに彷徨し、無駄な努力を続けてゐるものと見られたかも知れない。俳句は「私小説」的なものであり、自己中心の日常茶飯に於ける抒情を本質とするものであるとする見方からすれば、そのやうに思はれるのも当然であるかも知れない。

併し、俳句は文学として、詩として、小説と平行するものであり、思想性、社会性を持つものであるとする私の考へからすれば決して迷路に彷徨するものではないと固く信じてゐる。私の俳句観が果して作品の上に正しく現はされてゐるかどうか、これは他の批判に任せるよ

り仕方がない。

本句集の最初の方は戦争中からの非常に古い表現が残ってゐるが、二年ほど経つてから急激に変化してゐる。この時代は奔放に種々な試みをしてゐるが、句集を編むときの考へ方からして、最も多くの作品を捨てたことを告白して置く。

昭和二十七年八月

瀧 春一



瓦 礫

昭和二十七年十一月廿五日印刷
昭和二十七年十二月一日發行

頒価百三拾円

暖流
2
叢書

(第二集) シリーズ編

著者 滝

春 一

發行者 古川 克巳

印刷者 稲田 文宏社
東京都文京区湯島四ノ四

發行所

俳句図書刊行会

東京都江戸川区平井三ノ三六
振替東京一八〇五六一番